

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

縄文・古代史編

第12回・縄文時代の平岸② 縄文土器からわかること

前回の連載で天神山遺跡・東山遺跡・平岸坊主山遺跡をご紹介しました。今回はそこから出土した物から何がわかるか考えたいと思います。縄文時代の歴史について書かれた本や教科書を見ると、土器や石器、そして住居跡(遺構)が話題の中心です。逆に言うと、それ以外の人骨や衣服、木工品などは取り扱われていません。なぜでしょうか？それは、日本の場合土壌に火山灰を含むので、土壌が酸性となり、骨や植物が溶けてしまい残らないからです。こういうものが残るのは、例えば貝塚のような周囲にたっぷりカルシウムが溶け込んでいるような場所であったり、洪水で急速に埋め立てられたような特殊な場所だけです。ですから、縄文人がどういう服を着て、どのような木工品を使っていたかはよくわかっていません。平岸の遺跡でもこれらの遺物は見つかっていませんし、今後見つかる可能性は低いと思います。

縄文土器の特徴はなんといってもその装飾性にあります。土器の表面には縄や貝殻、棒などを使い、様々なデザインが描かれています。ファッションに流行があるように、縄文土器の模様も流行に左右されたようで、縄文時代の初めには貝殻の跡をつけるのがはやり、中期には縄目模様はやりです。縄文土器それ自体からは、何年前に作られたものかという情報を引き出すことはできませんが、運よく植物片などがいっしょに出土した場合、炭素同位体を測定することで何年前のものかを知ることができます。このようにして、Aパターンデザインの土器は縄文時代早期のもの、Bパターンのデザインは縄文時代中期のもの、と推定することができます。また、当時の日本は現在のよう画一された文化ではなく、地方ごとに異なる文化が並立しており(図2)、縄文土器もそれぞれ






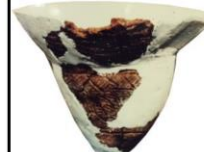
道北・道東 タイプ				
	絡縄体圧痕文土器		北筒式土器	
東北・道南 タイプ				
	貝殻文土器	縄文尖底土器	円筒式土器	深鉢形土器
	縄文時代早期	縄文時代前期	縄文時代中期	縄文時代後期
				縄文時代晩期

図1. 平岸の縄文遺跡から出土した縄文土器のタイプ分け

の文化圏で異なっていました。出土した土器をそれぞれの地方のものと比較することで、この文化圏に属していたのかがわかります。このような考えをもとに平岸の遺跡から出土した縄文土器を整理したものが図1です。時代ごとに異なるデザイン土器が出土していることがわかります。ここで、注目したいのが縄文時代早期の貝殻文土器です。当時、縄文海進により現在より内陸部まで海岸が侵入していた(連載第10回参照)とはいえ、丘珠空港のあたりまで行かないと海に接することはできませんでしたが、当時の平岸の縄文人はそれぐらいの行動半径を持っていたということ、身近な道具として日常的に貝殻を利用していたことがわかります。また、当時このあたりは東北・道南文化圏に属しており、石狩低地帯をはさんで、道北・道東文化圏に接していましたが(図2)、東北・道南タイプと道北・道東タイプの土器が出土していることから、この境界は絶対的なものではなく時代によって移動しており、気候が寒冷化すると道北・道東圏の勢力下にはいつていたことがわかります。縄文時代の平岸は2つの文化圏のはざまに位置する異文化の接点だったといえるでしょう。

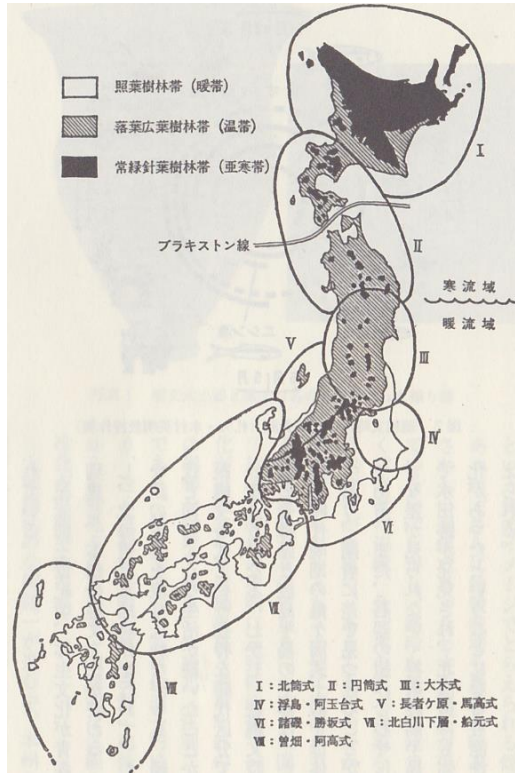


図2. 縄文時代の文化圏(さっぽろ文庫90「古代に遊ぶ」51ページより引用)

謝辞：本稿の執筆にあたり札幌市埋蔵文化財センター藤井誠二氏には多くの有益な助言をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考資料 平岸百拾年、平岸百拾年編集委員会(1981)

札幌市文化財調査報告書Ⅲ、「T310遺跡」、札幌市教育委員会(1974)

札幌市文化財調査報告書四七、「T71遺跡」、札幌市教育委員会(1995)

さっぽろ文庫90、「古代に遊ぶ」、さっぽろ文庫編集室(1999)

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】 日本人の固有癖

本稿で述べたように縄文土器の特徴はその装飾性にあります。ときに機能性よりもファッション性を優先させてしまうのは、わたしたち日本人の固有癖のようなものでしょうか。戦国時代にはお茶を飲む湯呑を「名物」として重宝し、名物ひとつで城が立つといわれるぐらいのものでありましたが、最近では携帯電話にストラップやカバーをつけるのが流行です。あるいは縄文人の遺伝子が受け継がれているからかもしれませんね。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球

学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭

に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-3488

FOX: 0120-128-3588

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしております